

## Sanshirō Chapter 9 (Natsume Sōseki)

よじろう すす さんしろう せいようけん かい で とき 三四郎はとうとう精養軒の会へ出た。その時三四郎は黒い 紬 の羽織 を着た。この羽織は、三輪田のお光さんのおっかさんが織ってくれたのを、紋付に染めて、お光さんが縫い上げたものだと、母の手紙に長い説明がある。小包みが届いた時、いちおう着てみて、おもしろくないから、戸棚へ入れておいた。それを与次郎が、もったいないからぜひ着ろ着ろと言う。三四郎が着なければ、自分が持って行って着そうな 勢いであったから、つい着る気になった。着てみると悪くはないようだ。

三四郎はこのいでたちで、与次郎と二人で精養軒の玄関に立っていた。与次郎の説によると、お客はこうして迎えべきものだそうだ。三四郎はそんなことは知らなかった。第一自分がお客のつもりでいた。こうなると、紬の羽織ではなんだか安っぽい受け付けの気がする。制服を着てくればよかったと思った。そのうち会員がだんだん来る。与次郎は来る人をつらまえてきつとなんとか話をする。ことごとく旧知のようにあしらっている。お客が帽子と外套を給仕に渡して、広い梯子段の横を、暗い廊下の方へ折れると、三四郎に向かって、今のは誰 某だと教えてくれる。三四郎はおかげで知名な人の顔をだいぶ覚えた。

そのうちお客はほぼ集まった。約三十人足らずである。広田先生もいる。野々宮さんもいる。——これは理学者だけれども、絵や文学が好きだからというので、原口さんが、むりに引っ張り出したのだそうだ。原口さんはむろんいる。いちばんさきへ来て、世話を焼いたり、愛嬌を振りまいたり、フランス式の髯をつまんでみたり、万事忙しそうだ。

やがて着席となった。めいめいかつてな所へすわる。譲る者もなければ、争う者もない。そのうちでも広田先生はのろいにも似合わずいちばんに腰をおろしてしまった。ただ与次郎と三四郎だけがいっしょになって、入口に近く座を占めた。その他はことごとく偶然の向かい合わせ、隣同志であった。

野々宮さんと広田先生のあいだに縞の羽織を着た批評家がすわった。向こうには庄司という博士が座に着いた。これは与次郎のいわゆる文科で有力な教授である。フロックを着た品格のある男であった。髪を普通の倍以上長くしている。それが電燈の光で、黒く渦をまいて見える。広田先生の坊主頭と比べるとだいぶ相違がある。原口さんはだいぶ離れて席

を取った。あちらの角だから、遠く三四郎と真向かいになる。折襟に、幅の広い黒襦子<sup>むす</sup>を結んださきがぱっと開いて胸<sup>むね</sup>いっぱいになっている。与次郎が、フランスの画工<sup>アーチスト</sup>は、みんなああい<sup>へこおび</sup>襟飾りを着けるものだ<sup>おし</sup>と教えてくれた。三四郎は肉汁<sup>ソップ</sup>を吸いながら、まるで兵児帯<sup>むす</sup>の結び目のようだ<sup>め</sup>と考<sup>かんが</sup>えた。そのうち談話<sup>だんわ</sup>がだんだん始<sup>はじ</sup>まった。与次郎はビールを飲<sup>の</sup>む。いつものように口<sup>くち</sup>をきかない。さすがの男<sup>おとこ</sup>もきょうは少<sup>しょう</sup>々<sup>しょう</sup>謹<sup>つつし</sup>んでいとみえる。三四郎が、小<sup>ちい</sup>さな声<sup>こえ</sup>で、

「ちと、ダーターファブラをやらないか」と言う<sup>い</sup>と、「きょうはいけ<sup>こた</sup>ない」と答<sup>こた</sup>えたが、すぐ横<sup>よこ</sup>を向<sup>む</sup>いて、隣<sup>はなし</sup>の男<sup>おとこ</sup>と話<sup>はな</sup>を始<sup>はじ</sup>めた。あなたの、あの論<sup>ろん</sup>文<sup>ぶん</sup>を拝<sup>はい</sup>見<sup>けん</sup>して、大<sup>おお</sup>いに利益<sup>りえき</sup>を得<sup>え</sup>ましたとかなんとか礼<sup>れい</sup>を述<sup>の</sup>べている。ところがその論<sup>ろん</sup>文<sup>ぶん</sup>は、彼<sup>かれ</sup>が自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の前<sup>まえ</sup>で、さかんに罵<sup>のの</sup>倒<sup>たう</sup>したものだ<sup>め</sup>から、三四郎にはすこぶる不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>の思<sup>おも</sup>いがある。与次郎はまたこ<sup>こ</sup>っちを向<sup>む</sup>いた。

「その羽<sup>は</sup>織<sup>おり</sup>はなかなかりっぱだ。よく似<sup>に</sup>合<sup>あ</sup>う」と白<sup>しろ</sup>い紋<sup>もん</sup>をこ<sup>こ</sup>とさ<sup>さ</sup>ら注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>してながめている。その時<sup>とき</sup>向<sup>む</sup>こうの端<sup>はじ</sup>から、原<sup>はら</sup>口<sup>ぐち</sup>さん<sup>さん</sup>が、野<sup>の</sup>々<sup>のみ</sup>宮<sup>みや</sup>に話<sup>はな</sup>しかけた。元<sup>がん</sup>来<sup>らい</sup>が大<sup>おお</sup>きな声<sup>こえ</sup>の人<sup>ひと</sup>だから、遠<sup>とお</sup>くで応<sup>おう</sup>対<sup>たい</sup>するにはつご<sup>い</sup>うが<sup>い</sup>い。今<sup>いま</sup>まで向<sup>む</sup>かい合<sup>あ</sup>わせに言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>をか<sup>わ</sup>わして<sup>いた</sup>いた広<sup>ひろ</sup>田<sup>た</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>と庄<sup>しょう</sup>司<sup>じ</sup>という教<sup>きょう</sup>授<sup>じゆ</sup>は、二<sup>ふ</sup>人<sup>たり</sup>の応<sup>おう</sup>答<sup>とう</sup>を途<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>でさ<sup>お</sup>えぎ<sup>る</sup>こと<sup>を</sup>を恐<sup>おそ</sup>れて、談<sup>だん</sup>話<sup>わ</sup>をや<sup>め</sup>た。そ<sup>ほ</sup>の他<sup>か</sup>の人<sup>ひと</sup>もみんな黙<sup>だま</sup>った。会<sup>かい</sup>の中心<sup>ちゆうしん</sup>点<sup>てん</sup>がは<sup>は</sup>じ<sup>め</sup>て<sup>でき</sup>あ<sup>が</sup>った。

「野<sup>の</sup>々<sup>のみ</sup>宮<sup>みや</sup>さん光<sup>こう</sup>線<sup>せん</sup>の圧<sup>あつ</sup>力<sup>りよく</sup>の試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>はも<sup>も</sup>う済<sup>す</sup>みま<sup>し</sup>たか」

「いや、まだな<sup>な</sup>かな<sup>か</sup>だ」

「ずい<sup>て</sup>ぶん手<sup>て</sup>数<sup>すう</sup>がか<sup>か</sup>かるも<sup>も</sup>んだ<sup>だ</sup>ね。我<sup>われ</sup>々<sup>われ</sup>の職<sup>しょく</sup>業<sup>ぎやう</sup>も根<sup>こん</sup>気<sup>き</sup>仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>だ<sup>が</sup>、君<sup>きみ</sup>のほうはも<sup>も</sup>っと激<sup>げき</sup>しいよ<sup>う</sup>だ」

「絵<sup>え</sup>はイン<sup>いん</sup>ス<sup>す</sup>ピ<sup>ぴ</sup>レー<sup>れい</sup>ションで<sup>で</sup>す<sup>す</sup>ぐか<sup>か</sup>けるから<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>が、物<sup>ぶつ</sup>理<sup>り</sup>の<sup>じつ</sup>験<sup>けん</sup>は<sup>は</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>ない」

「イン<sup>いん</sup>ス<sup>す</sup>ピ<sup>ぴ</sup>レー<sup>れい</sup>ションには<sup>は</sup>辟<sup>へき</sup>易<sup>えき</sup>する。この夏<sup>なつ</sup>ある所<sup>ところ</sup>を<sup>を</sup>通<sup>とお</sup>つたら<sup>ら</sup>ばあ<sup>あ</sup>さん<sup>さん</sup>が二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>で問<sup>もん</sup>答<sup>どう</sup>をして<sup>して</sup>いた。聞<sup>き</sup>いて<sup>み</sup>ると梅<sup>つゆ</sup>雨<sup>あ</sup>はも<sup>も</sup>う明<sup>めい</sup>けた<sup>た</sup>ん<sup>だ</sup>ら<sup>う</sup>か、ど<sup>ど</sup>う<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>とい<sup>い</sup>う研<sup>けん</sup>究<sup>きゆう</sup>なん<sup>なん</sup>だ<sup>が</sup>、一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>ばあ<sup>ばあ</sup>さん<sup>さん</sup>が、昔<sup>むかし</sup>は<sup>は</sup>雷<sup>かみなり</sup>さえ鳴<sup>な</sup>れば梅<sup>めい</sup>雨<sup>あ</sup>は明<sup>めい</sup>けるに<sup>に</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>つて<sup>て</sup>いた<sup>が</sup>、近<sup>ちか</sup>ごろ<sup>ごろ</sup>じゃ<sup>じゃ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>ない<sup>い</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>して<sup>いて</sup>いる。す<sup>す</sup>ると一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>が</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>して<sup>して</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>して、雷<sup>かみなり</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ら<sup>ら</sup>いで<sup>で</sup>明<sup>めい</sup>ける<sup>る</sup>こと<sup>と</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>ない<sup>い</sup>と<sup>と</sup>憤<sup>ふん</sup>慨<sup>がい</sup>して<sup>いて</sup>いた。――絵<sup>え</sup>も<sup>も</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>り、今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>絵<sup>え</sup>は<sup>は</sup>イン<sup>いん</sup>ス<sup>す</sup>ピ<sup>ぴ</sup>レー<sup>れい</sup>ションぐ<sup>ぐ</sup>ら<sup>ら</sup>いで<sup>で</sup>か<sup>か</sup>ける<sup>る</sup>こと<sup>と</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>ない。ね<sup>ね</sup>え<sup>え</sup>田<sup>た</sup>村<sup>むら</sup>さん、小<sup>しょう</sup>説<sup>せつ</sup>だ<sup>だ</sup>つて、そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う」

となり しょうせつか おとこ じぶん げんこう さいそく  
隣に田村という小説家がすわっていた。この男は自分のインスピレーションは原稿の催促  
いがい いた こた おおわら あらた  
以外になんにもないと答えたので、大笑いになった。田村は、それから改めて、野々宮さん  
さんに、光線に圧力があるものか、あれば、どうして試験するかと聞きだした。野々宮さんの答  
はおもしろかった。――

マイカ なに じゅうろくむさし おお うす えんばん つく すいしょう いと つ  
雲母か何かで、十六武蔵ぐらいの大きさの薄い円盤を作って、水晶の糸で釣るして、  
しんくう お めん アークとう ひかり ちよっかく お  
真空のうちに置いて、この円盤の面へ弧光燈の光を直角にあてると、この円盤が光に圧さ  
れて動く。と言うのである。

いちざ みみ かたむ き さんしろう はら ふくじんづけ かん  
一座は耳を傾けて聞いていた。なかにも三四郎は腹のなかで、あの福神漬の缶のなかに、そ  
んな装置がしてあるのだらうと、上京のさい、望遠鏡で驚かされた昔を思い出した。

きみ きみ ちい こえ よじろう あたま ふ  
「君、水晶の糸があるのか」と小さい声で与次郎に聞いてみた。与次郎は頭を振っている。

のみや  
「野々宮さん、水晶の糸がありますか」

「ええ、水晶の粉をね。酸水素吹管の炎で溶かしておいて、両方の手で、左右へ引っ張る  
ほそ  
と細い糸ができるのです」

三四郎は「そうですか」と言ったぎり、引っ込んだ。今度は野々宮さんの隣にいる縞の羽織  
ひひょうか くち だ  
の批評家が口を出した。

われわれ ほうめん ぜんぜんむがく き  
「我々はそういう方面へかけると、全然無学なんですが、はじめはどうして気がついたもの  
でしょうな」

りろんじょう いらいよそう ひと  
「理論上はマクスウェル以来予想されていたのですが、それをレベデフという人がはじめて  
じっけん しょうめい ちか すいせい お たいよう ほう  
実験で証明したのです。近ごろあの彗星の尾が、太陽の方へ引きつけられべきはずである  
のに、出るたびにいつでも反対の方角になびくのは光の圧力で吹き飛ばされるんじゃないかな  
うかとおも  
うかと思いついた人もあるくらいです」

批評家はだいぶ感心したらしい。

おも だいいちおお  
「思いつきもおもしろいが、第一大きくていいですね」と言った。

「大きいばかりじゃない、罪つみがなくて愉快ゆかいだ」と広田先生ひろたせんせいが言った。

「それでその思いつきがはずれたら、なお罪はらぐちがなくていい」と原口さんわらが笑っている。

「いや、どうもあたっているらしい。光線こうせんの圧力あつりょくは半径はんけいの二乗にじょうに比例ひれいするが、引力いんりょくのほうは半径さんじょうの三乗さんじょうに比例ひれいするんだから、物ものが小さちいくなればなるほど引力いんりょくのほうまが負まけて、光線こうせんの圧力あつりょくが強つよくなる。もし彗星すいせいの尾おが非常ひじょうに細こまかい小片パーチクルからできているとすれば、どうしても太陽たいようとは反対はんたいの方ほうへ吹き飛ばふされるわけだ」

野々宮ののみやは、ついまじめになった。すると原口はらぐちが例れいの調子ちょうしで、

「罪つみがない代かわりに、たいへん計算けいさんがめんどうになってきた。やっぱり一利一害いちりいちがいだ」と言った。この一言いちごんで、人々ひとびとはもとのとおりの気分きぶんに復ふくした。広田先生ひろたせんせいが、こんな事ことを言う。

「どうも物理学者ぶつりがくしゃは自然派しぜんはじゃだめのようなだね」

物理学者ぶつりがくしゃと自然派しぜんはの二に字じは少すくなからず満場まんじょうの興きょう味みを刺し激げきした。

「それはどういう意味いみですか」と本人ほんにんの野々宮さんののみやが聞き出だした。広田先生ひろたせんせいは説明せつめいしなければならなくなった。

「だって、光線しけんの圧力あつりょくを試験しけんするために、目めだけあけて、自然しぜんを観かん察さつしていたって、だめだからさ。自然しぜんの献立こんだてのうち、光線しけんの圧力あつりょくという事じ実じつは印刷いんさつされていないようじゃないか。だから人工じんこう的に、水すい晶しょうの糸いとだの、真しん空くうだの、雲母まいもだのという装そう置ちをして、その圧力あつりょくが物理学者ぶつりがくしゃの目みに見えるように仕掛しかけるのだろう。だから自然派しぜんはじゃないよ」

「しかし浪ろーまん漫派はでもないだろう」と原口さんはらぐちがまぜ返かえした。

「いや浪ろーまん漫派はだ」と広田先生ひろたせんせいがもったいらしく弁解べんかいした。「光線こうせんと、光線こうせんを受うけるものものとを、普通ふつうの自然しぜん界かいにおいては見出みだせないような位置いち関係かんけいに置おくところがまったく浪ろーまん漫派はじゃないか」

「しかし、いったんそういう位置いじょう関係かんけいに置おいた以上いじょうは、光線こうせん固有こゆうの圧力あつりょくを観かん察さつするだけだから、それからあとは自然派しぜんはでしょう」と野々宮さんののみやが言った。

「すると、物理学者は浪漫的自然派ですね。文学のほうでいうと、イブセンのようなものじゃないか」と筋向こうの博士が比較を持ち出した。

「さよう、イブセンの劇は野々宮君と同じくらいな装置があるが、その装置の下に働く人物は、光線のように自然の法則に従っているか疑わしい」これは縞の羽織の批評家の言葉であった。

「そうかもしれないが、こういうことは人間の研究上記憶しておくべき事だと思ふ。――すなわち、ある状況のもとに置かれた人間は、反対の方向に働きうる能力と権力とを有している。ということなんだが、――ところが妙な習慣で、人間も光線も同じように器械的の法則に従って活動すると思うものだから、時々とんだ間違いができる。おこらせようと思つて装置をすると、笑つたり、笑わせようともくろんでかかると、おこつたり、まるで反対だ。しかしどちらにしても人間に違いない」と広田先生がまた問題を大きくしてしまつた。

「じゃ、ある状況のもとに、ある人間が、どんな所作をしてもしぜんだということになりますね」と向こうの小説家が質問した。広田先生は、すぐ、

「ええ、ええ。どんな人間を、どう描いても世界に一人くらいはいるようじゃないですか」と答えた。「じっさい人間たる我々は、人間らしからざる行為動作を、どうしたって想像できるものじゃない。ただへたに書くから人間と思われぬのじゃないですか」

小説家はそれで黙つた。今度は博士がまた口をきいた。

「物理学でも、ガリレオが寺院の釣りランプの一振動の時間が、振動の大小にかかわらず同じであることに気がついたり、ニュートンが林檎が引力で落ちるのを発見したりするのは、はじめから自然派ですね」

「そういう自然派なら、文学のほうでも結構でしょう。原口さん、絵のほうでも自然派がありますか」と野々宮さんが聞いた。

「あるとも。恐るべきクールベエというやつがいる。[vérité vraie.]なんでも事実でなければ承知しない。しかしそう猖獗を極めてるものじゃない。ただ一派として存在を認められ

るだけさ。またそうでなくっちゃ<sup>こま</sup>困るからね。小説だって同じことだろう、ねえ君。<sup>きみ</sup>やっぱりモローや、シャバンヌのようなのもいるはずだろうじゃないか」

「いるはずだ」と隣の小説家が答えた。

食<sup>しょくご</sup>後には卓<sup>たくじょう</sup>上演<sup>えんげつ</sup>も何<sup>なに</sup>もなかった。ただ原<sup>はら</sup>口<sup>ぐち</sup>さんが、しきりに九<sup>くだん</sup>段<sup>うえ</sup>の上<sup>どうぞう</sup>の銅<sup>わくち</sup>像<sup>うくち</sup>の悪<sup>わる</sup>口<sup>くち</sup>を言<sup>い</sup>っていた。あんな銅<sup>た</sup>像<sup>た</sup>をむやみに立<sup>た</sup>てられては、東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>市民<sup>しみん</sup>が迷<sup>めい</sup>惑<sup>わく</sup>する。それより、美<sup>うつく</sup>しい芸<sup>げい</sup>者<sup>しゃ</sup>の銅<sup>き</sup>像<sup>き</sup>でもこしらえるほう<sup>き</sup>が気<sup>き</sup>が利<sup>き</sup>いているという説<sup>せつ</sup>であつた。与<sup>よ</sup>次<sup>じろ</sup>郎<sup>ろう</sup>は三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>に九<sup>きゅう</sup>段<sup>だん</sup>の銅<sup>わくち</sup>像<sup>うくち</sup>は原<sup>な</sup>口<sup>わ</sup>さんと仲<sup>な</sup>の悪<sup>わる</sup>い人<sup>ひと</sup>が作<sup>つく</sup>ったんだと教<sup>おし</sup>えた。

会<sup>かい</sup>が済<sup>す</sup>んで、外<sup>そと</sup>へ出<sup>で</sup>るといい月<sup>つき</sup>であつた。今<sup>こん</sup>夜<sup>や</sup>の広<sup>ひろ</sup>田<sup>た</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>は庄<sup>しょう</sup>司<sup>じ</sup>博<sup>はく</sup>士<sup>し</sup>によい印<sup>いん</sup>象<sup>しょう</sup>を与<sup>あた</sup>えたりうかと与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>が聞<sup>き</sup>いた。三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>は与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>と答<sup>こた</sup>えた。与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>は共<sup>きやう</sup>同<sup>どう</sup>水<sup>すい</sup>道<sup>どう</sup>栓<sup>せん</sup>のそばに立<sup>た</sup>つて、この夏<sup>なつ</sup>、夜<sup>よる</sup>散<sup>さん</sup>歩<sup>ぼ</sup>に來<sup>き</sup>て、あま<sup>あ</sup>り暑<sup>あつ</sup>いからこ<sup>こ</sup>で水<sup>みず</sup>を浴<sup>あ</sup>びていたら、巡<sup>じゆん</sup>査<sup>さ</sup>に見<sup>み</sup>つかつて、<sup>すりばち</sup>山<sup>やま</sup>へ駆<sup>か</sup>け上<sup>あ</sup>がったと話<sup>はな</sup>した。二<sup>ふた</sup>人<sup>たり</sup>は播<sup>み</sup>鉢<sup>かえ</sup>山<sup>やま</sup>の上<sup>うへ</sup>で月<sup>つき</sup>を見<sup>み</sup>て帰<sup>かえ</sup>った。

帰<sup>かえ</sup>り道<sup>みち</sup>に与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>が三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>に向<sup>む</sup>かつて、突<sup>とつ</sup>然<sup>ぜん</sup>借<sup>しゃ</sup>金<sup>きん</sup>の言<sup>い</sup>訳<sup>わけ</sup>をしだした。月<sup>つき</sup>のさえた比<sup>ひ</sup>較<sup>かく</sup>的<sup>てき</sup>寒<sup>さむ</sup>い晩<sup>ばん</sup>である。三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>はほとん<sup>ほとん</sup>ど金<sup>かね</sup>の事<sup>こと</sup>などは考<sup>かん</sup>えてい<sup>い</sup>なかつた。言<sup>い</sup>訳<sup>わけ</sup>を聞<sup>き</sup>くのでさ<sup>さ</sup>え本<sup>ほん</sup>気<sup>き</sup>ではない。どうせ返<sup>かえ</sup>すこと<sup>こと</sup>はあるま<sup>ま</sup>いと思<sup>おも</sup>っている。与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>もけ<sup>け</sup>っして返<sup>かえ</sup>すとは言<sup>い</sup>わない。た<sup>た</sup>だ返<sup>かえ</sup>せない事<sup>じ</sup>情<sup>じやう</sup>をい<sup>い</sup>ろいろに話<sup>はな</sup>す。その話<sup>はな</sup>し方<sup>かた</sup>のほう<sup>ほう</sup>が三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>にはよ<sup>よ</sup>ほ<sup>ほ</sup>どお<sup>お</sup>もしろい。――自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の知<sup>し</sup>つて<sup>つ</sup>るさ<sup>さ</sup>る男<sup>おとこ</sup>が、失<sup>しつ</sup>恋<sup>れん</sup>の結<sup>けつ</sup>果<sup>か</sup>、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>やにな<sup>な</sup>つて、とうとう自<sup>じ</sup>殺<sup>さつ</sup>をしよう<sup>しよう</sup>と決<sup>けつ</sup>心<sup>しん</sup>したが、海<sup>うみ</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>や川<sup>かわ</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>や、噴<sup>ふん</sup>火<sup>か</sup>口<sup>こう</sup>はな<sup>な</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>や、首<sup>くび</sup>をく<sup>く</sup>くるのはも<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>とも<sup>も</sup>い<sup>い</sup>やとい<sup>い</sup>うわ<sup>わ</sup>けで、や<sup>や</sup>むをえ<sup>え</sup>ず短<sup>たん</sup>銃<sup>じゆう</sup>を買<sup>か</sup>つてきた。買<sup>か</sup>つてきて、ま<sup>ま</sup>だ目<sup>もく</sup>的<sup>てき</sup>を遂<sup>すい</sup>行<sup>こう</sup>しな<sup>な</sup>いう<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>に、友<sup>とも</sup>だちが金<sup>か</sup>を借<sup>か</sup>りに<sup>に</sup>きた。金<sup>か</sup>はな<sup>な</sup>いと断<sup>ことわ</sup>つたが、ぜ<sup>ぜ</sup>ひど<sup>ど</sup>うか<sup>か</sup>して<sup>して</sup>くれ<sup>くれ</sup>と訴<sup>う</sup>えるので、し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>た<sup>た</sup>な<sup>な</sup>しに、大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>の短<sup>たん</sup>銃<sup>じゆう</sup>を貸<sup>か</sup>して<sup>して</sup>や<sup>や</sup>つた。友<sup>しち</sup>だ<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>はそれ<sup>い</sup>を質<sup>いち</sup>に入<sup>い</sup>れて<sup>て</sup>一<sup>いち</sup>時<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>だ。つ<sup>つ</sup>ご<sup>ご</sup>う<sup>う</sup>が<sup>が</sup>つ<sup>つ</sup>いて、質<sup>しち</sup>を受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>出<sup>だ</sup>して<sup>して</sup>返<sup>かえ</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>きた<sup>きた</sup>時<sup>とき</sup>は、肝<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>の短<sup>たん</sup>銃<sup>じゆう</sup>の主<sup>ぬし</sup>はも<sup>も</sup>う死<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>気<sup>き</sup>がな<sup>な</sup>くな<sup>くな</sup>つて<sup>て</sup>いた。だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>らこ<sup>こ</sup>の男<sup>おとこ</sup>の命<sup>いのち</sup>は金<sup>か</sup>を借<sup>か</sup>りに<sup>に</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>れた<sup>れた</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>に助<sup>たす</sup>か<sup>か</sup>つた<sup>つた</sup>と<sup>と</sup>同<sup>おな</sup>じ<sup>じ</sup>事<sup>じ</sup>である。

「<sup>こと</sup>そういう<sup>こと</sup>事<sup>じ</sup>もある<sup>ある</sup>から<sup>から</sup>な<sup>な</sup>あ」と与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>が言<sup>い</sup>つた。三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>にはた<sup>た</sup>だお<sup>お</sup>か<sup>か</sup>しい<sup>しい</sup>だけ<sup>だけ</sup>である。そのほ<sup>ほ</sup>か<sup>か</sup>にはな<sup>な</sup>ん<sup>ん</sup>ら<sup>ら</sup>の意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>い。高<sup>たか</sup>い<sup>い</sup>月<sup>つき</sup>を仰<sup>あお</sup>いで大<sup>おお</sup>きな<sup>きな</sup>声<sup>こゑ</sup>を<sup>を</sup>出<sup>だ</sup>して<sup>して</sup>笑<sup>わら</sup>つた。金<sup>かね</sup>を返<sup>かえ</sup>され<sup>れ</sup>ない<sup>ない</sup>でも愉<sup>ゆ</sup>快<sup>かい</sup>である。与<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>は、

「笑<sup>ちゅう</sup>つち<sup>い</sup>や<sup>い</sup>かん」と注<sup>ちゅう</sup>意<sup>い</sup>した。三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>はな<sup>な</sup>お<sup>お</sup>か<sup>か</sup>しく<sup>しく</sup>な<sup>な</sup>つた。

「笑わないで、よく考<sup>かんが</sup>えてみろ。おれが金を返さなければこそ、君<sup>きみ</sup>が美禰<sup>みね</sup>子<sup>こ</sup>さんから金<sup>か</sup>を借りることができたんだろう」

三四郎は笑うのをやめた。

「それで？」

「それだけでたくさんじゃないか。——君、あの女<sup>おんな</sup>を愛<sup>あい</sup>しているんだろう」

与次郎はよく知<sup>し</sup>っている。三四郎はふんと言って、また高い月<sup>み</sup>を見た。月のそば<sup>しろ</sup>に白い雲<sup>くも</sup>が出た。

「君、あの女には、もう返したのか」

「いいや」

「いつまでも借りておいてやれ」

のん気<sup>き</sup>な事を言う。三四郎はなんとも答<sup>こた</sup>えなかった。しかしいつまでも借りておく気<sup>き</sup>はむろんなかった。じつは必要<sup>ひつよう</sup>な二十円<sup>にじゅうえん</sup>を下宿<sup>げしゆく</sup>へ払<sup>はら</sup>って、残り<sup>のこ</sup>の十円<sup>じゅうえん</sup>をそのあくる日<sup>ひ</sup>すぐ里見<sup>さとみ</sup>の家<sup>いえ</sup>へ届けようと思<sup>おも</sup>ったが、今<sup>いま</sup>返<sup>かえ</sup>してはかえって、好意<sup>こうい</sup>にそむいて、よくないと考<sup>かんが</sup>え直<sup>なお</sup>して、せっか<sup>もんない</sup>く門内<sup>もんない</sup>に、はいられる機<sup>き</sup>会<sup>かい</sup>を犠<sup>ぎ</sup>牲<sup>せい</sup>にしてまでも引<sup>ひ</sup>き返<sup>かえ</sup>した。その時<sup>とき</sup>何<sup>なに</sup>かの拍<sup>ひょう</sup>子<sup>し</sup>で、気<sup>き</sup>がゆるんで、その十円<sup>じゅうえん</sup>をくずしてしまった。じつは今夜<sup>こんや</sup>の会<sup>かい</sup>費<sup>ひ</sup>もそのうちから出<sup>で</sup>ている。自分<sup>じぶん</sup>ばかりではない。与次郎<sup>よじろう</sup>もそのうちから出<sup>で</sup>ている。あとには、ようやく二<sup>に</sup>、三円<sup>さんえん</sup>残<sup>のこ</sup>っている。三四郎はそれで冬<sup>ふゆ</sup>シャツ<sup>か</sup>を買<sup>か</sup>おうと思<sup>おも</sup>った。

じつは与次郎<sup>よじろう</sup>がとうてい返<sup>かえ</sup>しそもないから、三四郎<sup>さんしろう</sup>は思<sup>おも</sup>いきって、このあいだ国元<sup>くにもと</sup>へ三十円<sup>さんじゅうえん</sup>の不足<sup>ふそく</sup>を請<sup>せい</sup>求<sup>きゅう</sup>した。十分<sup>じゅうぶん</sup>な学資<sup>がくし</sup>を月々<sup>つきづき</sup>もらっているながら、ただ不足<sup>ふそく</sup>だからといって請<sup>せい</sup>求<sup>きゅう</sup>するわけにはゆかない。三四郎<sup>さんしろう</sup>はあまり嘘<sup>うそ</sup>をついたことのない男<sup>おとこ</sup>だから、請<sup>せい</sup>求<sup>きゅう</sup>の理<sup>り</sup>由<sup>ゆ</sup>にいたって困<sup>こん</sup>却<sup>きゃく</sup>した。しかたがないからただ友<sup>とも</sup>だちが金<sup>かね</sup>をなくして弱<sup>よわ</sup>っていたから、つい気<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>になって貸<sup>か</sup>してやった。その結<sup>け</sup>果<sup>か</sup>として、今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>はこ<sup>こ</sup>ち<sup>ち</sup>が弱<sup>お</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>う</sup>にな<sup>な</sup>った。どうか送<sup>おく</sup>ってくれと書<sup>か</sup>いた。

すぐ返<sup>へん</sup>事<sup>じ</sup>を出<sup>だ</sup>してくれれば、もう届<sup>とど</sup>く時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>であるのにまだ来<sup>こ</sup>ない。今夜<sup>こんや</sup>あたりはことによると来<sup>き</sup>ているかもしれぬくらいに考<sup>かんが</sup>えて、下宿<sup>げしゆく</sup>へ帰<sup>かえ</sup>ってみると、はたして、母<sup>はは</sup>の手<sup>て</sup>蹟<sup>せき</sup>で書<sup>か</sup>いた

ふうとう つくえ うえ の ふしぎ かなら かきどめ く  
封筒がちゃんと机の上に乗っている。不思議なことに、いつも必ず書留で来るのが、きょうは三銭切手一枚で済ましてある。開いてみると、中はいつになく短い。母としてはふしんせつ ようじ もう おさ いらい ののみや ほう おく  
不親切なくらい、用事だけで申し納めてしまった。依頼の金は野々宮さんの方へ送ったから、野々宮さんから受け取れというさしずすぎない。三四郎は床を取ってねた。

よくじつ ところ い  
翌日もその翌日も三四郎は野々宮さんの所へ行かなかった。野々宮さんのほうでもなんともいってこなかった。そうしているうちに一週間ほどたった。しまいには野々宮さんから、下宿げじょ つか てがみ たの  
の下女を使い、手紙をよこした。おっかさんから頼まれものがあるから、ちょっと来てくれるとある。三四郎は講義の隙をみて、また理科大学の穴倉へ降りていった。そこで立談のあいだに事を済ませようと思ったところが、そううまくはいかなかった。この夏は野々宮さんだけで専領して、部屋に髭のはえた人が二、三人いる。制服を着た学生も二、三人いる。それが、みんな熱心に、静粛に、頭の上の日のあたる世界をよそにして、研究をやっている。そのうちで野々宮さんはもっとも多忙に見えた。部屋の入口に顔を出した三四郎をちょっと見て、無言のまま近寄ってきた。

くに かね とど と き いま も  
「国から、金が届いたから、取りに来てくれたまえ。今ここに持っていないから。それからまだほかに話す事もある」

さんしろう こた こんや たず ののみや かんが  
三四郎ははあと答えた。今夜でもいいかと尋ねた。野々宮はすこしく考えていたが、しまいにおも い あなぐら で りがくしゃ  
に思いきってよろしいと言った。三四郎はそれで穴倉を出た。出ながら、さすがに理学者はこんき かんしん なつみ ふくじんづけ かん ぼうえんきょう いぜん  
根気のいいものだと感心した。この夏見た福神漬の缶と、望遠鏡が依然としてもとのとおりの位置に備えつけてあった。

つぎ こうぎ じかん よじろう あ  
次の講義の時間に与次郎に会ってこれこれだと話すと、与次郎はばかだと言わないばかりに三四郎をながめて、

「だからいつまでも借りておいてやれと言ったのに。よけいな事をして年寄りには心配をかける。宗人さんにはお談義をされる。これくらい愚な事はない」とまるで自分から事が起こったとは認めていない申し分である。三四郎もこの問題に関しては、もう与次郎の責任を忘れてしまった。したがって与次郎の頭にかかってこない返事をした。

「いつまでも借りておくのは、いやだから、家へそう言ってやったんだ」



「君はいやでも、向こうでは喜ぶよ」

「なぜ」

このなぜが三四郎自身にはいくぶんか虚偽の響らしく聞こえた。しかし相手にはなんらの影響も与えなかったらしい。

「あたりまえじゃないか。ぼくを人にしたって、同じことだ。ぼくに金が余っているとすれば、そうすれば、その金を君から返してもらいよりも、君に貸しておくほうがいい心持ちだ。人間はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切がしてみたいものだ」

三四郎は返事をしないで、講義を筆記しはじめた。二、三行書きだすと、与次郎がまた、耳のそばへ口を持ってきた。

「おれだって、金のある時はたびたび人に貸したことがある。しかしだれもけっして返したものが無い。それだからおれはこのとおりに愉快だ」

三四郎はまさか、そうかとも言えなかった。薄笑いをしてだけで、またペンを走らしはじめた。与次郎もそれからはおちついて、時間の終るまで口をきかなかった。

ベルが鳴って、二人肩を並べて教場を出る時、与次郎が、突然聞いた。

「あの女は君にほれているのか」

二人のあとから続々聴講生が出てくる。三四郎はやむをえず無言のまま梯子段を降りて横手の玄関から、図書館わきの空地へ出て、はじめて与次郎を顧みた。

「よくわからない」

与次郎はしばらく三四郎を見ていた。

「そういうこともある。しかしよくわかったとして、君、あの女の夫になれるか」

三四郎はいまだかつてこの問題を考えたことがなかった。美禰子に愛せられるという事実そのものが、彼女の夫たる唯一の資格のような気がしていた。言われてみると、なるほど疑問である。三四郎は首を傾けた。

「野々宮さんならなれる」と与次郎が言った。

「野々宮さんと、あの人は何か今までに関係があるのか」

三四郎の顔は彫りつけたようにまじめであった。与次郎は一口、

「知らん」と言った。三四郎は黙っている。

「また野々宮さんの所へ行って、お談義を聞いてこい」と言いすてて、相手は池の方へ行きかけた。三四郎は愚劣の看板のごとく突っ立った。与次郎は五、六歩行ったが、また笑いながら帰ってきた。

「君、いっそ、よし子さんをもらわないか」と言いながら、三四郎を引っ張って、池の方へ連れて行った。歩きながら、あれならいい、あれならいいと、二度ほど繰り返した。そのうちまたベルが鳴った。

三四郎はその夕方野々宮さんの所へ出かけたが、時間がまだすこし早すぎるので、散歩かたがた四丁目まで来て、シャツを買いに大きな唐物屋へはいった。小僧が奥からいろいろ持ってきたのをなでてみたり、広げてみたりして、容易に買わない。わけもなく鷹揚にかまえてみると、偶然美禰子とよし子が連れ立って香水を買いに来た。あらと言って挨拶をしたあとで、美禰子が、

「せんだってはお礼を述べた」と礼を述べた。三四郎にはこのお礼の意味が明らかにわかった。美禰子から金を借りたあくる日もう一ぺん訪問して余分をすぐに返すべきところを、ひとまず見合わせた代りに、二日ばかり待って、三四郎は丁寧な礼状を美禰子に送った。

手紙の文句は、書いた人の、書いた当時の気分をすなおに表わしたものではあるが、むろん書きすぎている。三四郎はできるだけ言葉を層々と排列して感謝の意を熱烈にいたした。普通の者から見ればほとんど借金しゃっきんの礼状とは思われないくらいに、湯気ゆげの立ったものであ

る。しかし感謝以外には、なんにも書いてない。それだから、自然の勢い、感謝が感謝以上になったのでもある。三四郎はこの手紙をポストに入れる時、時を移さぬ美禰子の返事を予期していた。ところがせっかくの封書はただ行ったままである。それから美禰子に会う機会はきょうまでなかった。三四郎はこの微弱なる「このあいだはありがとう」という反響に対して、はっきりした返事をする勇氣も出なかった。大きなシャツを両手で目のさきへ広げてながめながら、よし子がいるからああ冷淡なんだろうかと考えた。それからこのシャツもこの女の金で買うんだなと考えた。小僧はどれになさいますと催促した。

二人の女は笑いながらそばへ来て、いっしょにシャツを見てくれた。しまい、よし子が「これになさい」と言った。三四郎はそれにした。今度は三四郎のほうに香水の相談を受けた。いっこうわからない。ヘリオトロープと書いてある罎を持って、いいかげんに、これはどうですと言うと、美禰子が、「それにしましょう」とすぐ決めた。三四郎は気の毒なくらいであった。

表へ出て別れようとする、女のほうに互いにお辞儀を始めた。よし子が「じゃ行ってきてよ」と言う、美禰子が、「お早く……」と言っている。聞いてみて、妹が兄の下宿へ行くところだということがわかった。三四郎はまたきれいな女と二人連で追分の方へ歩くべき宵となった。日はまだまったく落ちていない。

三四郎はよし子といっしょに歩くよりは、よし子といっしょに野々宮の下宿で落ち合ねばならぬ機会をいささか迷惑に感じた。いっそのこと今夜は家へ帰って、また出直そうかと考えた。しかし、与次郎のいわゆるお談義を聞くには、よし子がそばにいてくれるほうが便利かもしれない。まさか人の前で、母から、こういう依頼があったと、遠慮なしの注意を与えるわけはなかろう。ことによると、ただ金を受け取るだけで済むかもわからない。――三四郎は腹の中で、ちょっとずるい決心をした。

「ぼくも野々宮さんの所へ行くところです」

「そう、お遊びに？」

「いえ、すこし用があるんです。あなたは遊びですか」

「いいえ、<sup>わたし</sup>私<sup>ごよう</sup>も御用なの」

<sup>りょうほう</sup>両<sup>おな</sup>方<sup>おな</sup>が同じようなことを聞いて、同じような<sup>こたえ</sup>答<sup>え</sup>を得た。しかし両方とも迷惑を感じている<sup>めいわく</sup>。しかし両方とも迷惑を感じている<sup>かん</sup>。  
<sup>けしき</sup>気色<sup>さんしろう</sup>がさらにない。三四郎<sup>ねん</sup>は念のため、じゃまじゃないかと<sup>たず</sup>尋ねてみた。ちっともじゃまには  
ならないそうである。<sup>おんな</sup>女<sup>ことば</sup>は言葉でじゃまを<sup>ひてい</sup>否定したばかりではない。<sup>かお</sup>顔<sup>かお</sup>ではむしろなぜそん  
なことを<sup>しつもん</sup>質問<sup>おどろ</sup>するかと<sup>おどろ</sup>驚いている。三四郎は店先のガスの<sup>みせさき</sup>光<sup>ひかり</sup>で、女の黒い目の中に、その  
<sup>みと</sup>驚き<sup>おも</sup>を認めたと<sup>しじつ</sup>思った。事実<sup>おお</sup>としては、ただ大きく黒く見えたばかりである。

「バイオリンを買いましたか」

「<sup>ごぞん</sup>どうして御存じ」

三四郎は返答に<sup>へんとう</sup>窮<sup>きゆう</sup>した。女は<sup>とんじゃく</sup>頓着なく、すぐ、こう言った。

「<sup>にい</sup>いくら兄さんにそう言っても、ただ買ってやる、買ってやるというばかりで、ちっとも買っ  
てくれなかったんですの」

三四郎は腹の中で、野々宮よりも<sup>ひろた</sup>広田よりも、むしろ<sup>よじろう</sup>与次郎を<sup>ひなん</sup>非難した。

<sup>ふたり</sup>二人は追分の通りを<sup>ほそ</sup>細い<sup>ろじ</sup>路地<sup>お</sup>に折れた。折れると中に家がたくさんある。暗い道を<sup>くら</sup>戸<sup>みち</sup>ごとの  
<sup>けんとう</sup>軒燈<sup>て</sup>が照らしている。その軒燈の<sup>ひと</sup>一つの<sup>まえ</sup>前にとまった。野々宮はこの奥<sup>おく</sup>にいる。

三四郎の下宿とはほとんど一丁ほどの距離である。野々宮がここへ<sup>うつ</sup>移ってから、三四郎は  
二、三度訪問したことがある。野々宮の部屋は<sup>へや</sup>広い<sup>ひろ</sup>廊下<sup>ろうか</sup>を<sup>つ</sup>突き<sup>あた</sup>当って、二段ばかりまっすぐに  
<sup>あ</sup>上がると、<sup>ひだりて</sup>左手<sup>はな</sup>に<sup>ふたま</sup>離れた二間<sup>みなみむ</sup>である。南向きによその広い庭をほとんど<sup>にわ</sup>椽<sup>えん</sup>の下<sup>した</sup>に<sup>ひか</sup>控えて、<sup>ひる</sup>昼  
も夜も<sup>よる</sup>至極<sup>しごく</sup>静かである。この<sup>はな</sup>離れ<sup>ざしき</sup>座敷<sup>た</sup>に<sup>とき</sup>立てこもった野々宮さんを見た時、なるほど家を<sup>たた</sup>畳  
んで下宿をするのも<sup>わる</sup>悪い<sup>おも</sup>思いつきではなかったと、はじめて来た時から、<sup>き</sup>感心<sup>かんしん</sup>したくらい、  
<sup>いごち</sup>居心地<sup>ところ</sup>のいい所である。その時野々宮さんは<sup>お</sup>廊下<sup>お</sup>へ<sup>じぶん</sup>下りて、<sup>へや</sup>下から<sup>のき</sup>自分の<sup>み</sup>部屋の<sup>あ</sup>軒<sup>あ</sup>を見上げ  
て、<sup>わらぶき</sup>ちょっと<sup>めずら</sup>見たまえ、<sup>やね</sup>藁<sup>かわら</sup>葺<sup>お</sup>だと言った。なるほど<sup>お</sup>珍<sup>お</sup>しく<sup>お</sup>屋根<sup>お</sup>に<sup>お</sup>瓦<sup>お</sup>を置いてなかった。

きょうは夜だから、<sup>よる</sup>屋根<sup>やね</sup>は<sup>み</sup>むろん<sup>へや</sup>見えないが、<sup>なか</sup>部屋<sup>でんとう</sup>の中には<sup>さんしろう</sup>電燈<sup>さんしろう</sup>がついている。三四郎は電燈  
を見る<sup>み</sup>やいなや<sup>わらぶき</sup>藁<sup>おも</sup>葺<sup>だ</sup>を思い出した。そうしておかしくなった。

「<sup>みょう</sup>妙な<sup>きやく</sup>お客が<sup>お</sup>落ち<sup>あ</sup>合ったな。<sup>いりぐち</sup>入口で<sup>あ</sup>会ったのか」と<sup>ののみや</sup>野々宮さんが<sup>いもうと</sup>妹に<sup>き</sup>聞いている。妹はしからざるむねを<sup>せつめい</sup>説明している。ついでに三四郎のようなシャツを買ったらよかろうと<sup>じょげん</sup>助言している。それから、このあいだのバイオリンは<sup>わせい</sup>和製で<sup>ね</sup>音が<sup>わる</sup>悪くっていけない。買うのをこれまで<sup>えんき</sup>延期したのだから、もうすこし<sup>よ</sup>良いのと<sup>たの</sup>買いかえてくれと<sup>たの</sup>頼んでいる。せめて<sup>みねこ</sup>美禰子さんくらい<sup>がまん</sup>のなら<sup>い</sup>我慢すると言っている。そのほか<sup>に</sup>似たりよったりの<sup>だだ</sup>駄々をしきりにこねている。野々宮さんは<sup>かお</sup>べつだん<sup>かお</sup>こわい顔もせず、<sup>やさ</sup>と<sup>ことば</sup>いって、優しい言葉もかけず、ただ<sup>さうか</sup>そうか<sup>さうか</sup>と聞いている。

三四郎はこのあいだなんにも言わずにいた。よし子は<sup>こ</sup>愚<sup>ぐ</sup>な<sup>こと</sup>事ばかり<sup>の</sup>述べる。かつ<sup>すこ</sup>少しも<sup>えんりよ</sup>遠慮をしない。それが<sup>おも</sup>ばかとも<sup>おも</sup>思えなければ、<sup>う</sup>わが<sup>と</sup>ま<sup>と</sup>も<sup>あに</sup>受け<sup>おうたい</sup>取れない。兄との<sup>お</sup>応待を<sup>お</sup>そばに<sup>い</sup>いて聞いていると、<sup>ひろ</sup>広い<sup>ひ</sup>日<sup>はたけ</sup>あたりの<sup>で</sup>いい<sup>こころも</sup>畑へ<sup>き</sup>出たような<sup>き</sup>心持ちがする。三四郎は<sup>き</sup>来たるべき<sup>き</sup>お<sup>き</sup>談義<sup>き</sup>の<sup>き</sup>事を<sup>き</sup>まるで<sup>き</sup>忘れて<sup>き</sup>しまった。その<sup>き</sup>時<sup>き</sup>突然<sup>き</sup>驚<sup>き</sup>かされた。

「ああ、わたし忘れていた。美禰子さんのお言伝<sup>ことづて</sup>があつてよ」

「そうか」

「うれしいでしょう。うれしくなくって？」

野々宮さんはかゆいような顔をした。そうして、三四郎の<sup>ほう</sup>方<sup>む</sup>を向いた。

「ぼくの妹はばかですね」と言った。三四郎はしかたなしに、ただ<sup>わら</sup>笑っていた。

「ばかじゃないわ。ねえ、<sup>おがわ</sup>小川さん」

三四郎はまた笑っていた。腹<sup>はら</sup>の中<sup>なか</sup>ではもう笑うのがいやになった。

「美禰子さんがね、<sup>にい</sup>兄<sup>い</sup>さんに<sup>ぶんげいきょうかい</sup>文芸協<sup>えんげいかい</sup>会<sup>つ</sup>の<sup>い</sup>演芸会<sup>い</sup>に連れて行ってちょうだいって」

「<sup>さとみ</sup>里見<sup>い</sup>さんといっしょに行ったらよかろう」

「<sup>ごよう</sup>御用<sup>い</sup>があるんですって」

「<sup>まえ</sup>お前<sup>い</sup>も行くのか」

「むろんだわ」

ののみや ゆ きた さんしろ ほう む こんやいもうと よ  
野々宮さんは行くとも行かないとも答えなかった。また三四郎の方を向いて、今夜 妹 を呼んだのは、まじめの用があるんだのに、あんなのん気ばかり言っていて困ると話した。聞いてみると、学者だけあって、存外淡泊である。よし子に縁談の口がある。国へそう言ってやったら、両親も異存はないと返事をしてきた。それについて本人の意見をよく確かめる必要が起こったのだと言う。三四郎はただ結構ですと答えて、なるべく早く自分のほうを片づけて帰ろうとした。そこで、

はは ねが き だ  
「母からあなたにごめんどうを願ったそうで」と切り出した。野々宮さんは、

たい つくえ ひきだ あず  
「なに、大してめんどうでもありませんがね」とすぐに机の引出しから、預かったものを出して、三四郎に渡した。

しんばい なが てがみ か よ ぎ じじょう つきづき  
「おっかさんが心配して、長い手紙を書いてよこしましたよ。三四郎は余儀ない事情で月々の学資を友だちに貸したと言うが、いくら友だちだって、そうむやみに金を借りるものじゃあるまいし、よし借りたって返すはずだろうって。いなかの者は正直だから、そう思うのもむりはない。それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸し方が大げさだ。親から月々学資を送ってもらふ身分でいながら、一度に二十円の三十円のと、人に用立てるなんて、いかにも無分別だとあるんですがね——なんだかぼくに責任があるように書いてあるから困る。……」

み わら き どく  
野々宮さんは三四郎を見て、にやにや笑っている。三四郎はまじめに、「お気の毒です」と言ったばかりである。野々宮さんは、わか き  
若い者を、極めつけるつもりで言ったんでないとみえて、すこ ちょうし か  
少し調子を変えた。

こと  
「なに、心配することはありませんよ。なんでもない事なんだから。ただおっかさんは、いなかの相場で、金の価値をつけるから、三十円がたいへん重くなるんだね。なんでも三十円あると、四人の家族が半年食っていけると書いてあったが、そんなものかな、君」と聞いた。よし子は大きな声を出して笑った。三四郎にもばかげているところがすこぶるおかしいのだが、母の言条が、まったく事実を離れた作り話でないのだから、そこに気がついた時には、なるほど軽率な事をして悪かったと少しく後悔した。

「そうすると、月に五円のわりだから、一人前一円二十五銭にあたる。それを三十日に割りつけると、四銭ばかりだが——いくらいなかでも少し安すぎるようだな」と野々宮さんが計算を立てた。

「何を食べたら、そのくらいで生きていられるでしょう」とよし子がまじめに聞きだした。三四郎も後悔する暇がなくなって、自分の知っているいなか生活のありさまをいろいろ話して聞かした。そのなかには宮籠りという慣例もあった。三四郎の家では、年に一度ずつ村全体へ十円寄付することになっている。その時には六十戸から一人ずつ出て、その六十人が、仕事を休んで、村のお宮へ寄って、朝から晩まで、酒を飲みつづけに飲んで、ごちそうを食いつづけに食うんだという。

「それで十円」とよし子が驚いていた。お談義はこれでどこかへいったらしい。それから少し雑談をして一段落ついた時に、野々宮さんがあらためて、こう言った。

「なにしろ、おっかさんのほうではね。ぼくが一応事情を調べて、不都合がないと認めたら、金を渡してくれろ。そうしてめんどろでもその事情を知らせてもらいたいというんだが、金は事情もなんにも聞かないうちに、もう渡してしまったしと、——どうするかね。君たしかに佐々木に貸したんですね」

三四郎は美禰子からもれて、よし子に伝わって、それが野々宮さんに知っているんだと判じた。しかしその金が巡り巡ってバイオリンに変形したものは、兄妹とも気がつかないから一種妙な感じがした。ただ「そうです」と答えておいた。

「佐々木が馬券を買って、自分の金をなくしたんだってね」

「ええ」

よし子はまた大きな声を出して笑った。

「じゃ、いいかげんにおっかさんの所へそう言ってあげよう。しかし今度から、そんな金はもう貸さないことにしたらいいでしょう」

三四郎は貸さないことにするむねを答えて、挨拶をして、立ちかけると、よし子も、もう帰ろうと言いだした。

「さっきの話をしなくっちゃ」と兄が注意した。

「よくってよ」と妹が拒絶した。

「よくはないよ」

「よくってよ。知らないわ」

兄は妹の顔を見て黙っている。妹は、またこう言った。

「だってしかたがないじゃ、ありませんか。知りもしない人の所へ、行くか行かないかって、聞いたって。好きでもきらいでもないんだから、なんにも言いようはありやしないわ。だから知らないわ」

三四郎は知らないわの本意をようやく会得した。兄妹をそのままにして急いで表へ出た。

人の通らない軒燈ばかり明らかな路地を抜けて表へ出ると、風が吹く。北へ向き直ると、まともに顔へ当たる。時を切って、自分の下宿の方から吹いてくる。その時三四郎は考えた。この風の中を、野々宮さんは、妹を送って里見まで連れて行ってやるだろう。

下宿の二階へ上って、自分の部屋へは行って、すわってみると、やっぱり風の音がする。三四郎はこういう風の音を聞くたびに、運命という字を思い出す。ごうと鳴ってくるたびにすくみたくなる。自分ながらけっして強い男とは思っていない。考えると、上京以来自分の運命はたいがい与次郎のためにこしらえられている。しかも多少の程度において、和氣靄然たる翻弄を受けるようにこしらえられている。与次郎は愛すべき悪戯者である。向後もこの愛すべき悪戯者のために、自分の運命を握られていそうに思う。風がしきりに吹く。たしかに与次郎以上の風である。

三四郎は母から来た三十円を枕元へ置いて寝た。この三十円も運命の翻弄が生んだものである。この三十円がこれからさきどんな働きをするか、まるでわからない。自分はこれを



みねこ かえ い 美禰子に返しに行く。美禰子がこれを受け取る時に、また一煽り来るにきまっている。三四郎はなるべく大きく来ればいいと思った。

三四郎はそれなり寝ついた。運命も与次郎も手を下しようのないくらいすこやかな眠りに入れた。すると半鐘の音で目がさめた。どこかで人声がする。東京の火事はこれで二へん目である。三四郎は寝巻の上へ羽織を引っかけて、窓をあけた。風はだいぶ落ちている。向こうの二階屋が風の鳴る中に、まっ黒に見える。家が黒いほど、家のうしろの空は赤かった。

三四郎は寒いのを我慢して、しばらくこの赤いものを見つめていた。その時三四郎の頭には運命がありありと赤く映った。三四郎はまた暖かい蒲団の中にもぐり込んだ。そうして、赤い運命の中で狂い回る多くの人の身の上を忘れた。

よ あ つね 夜が明ければ常の人である。制服をつけて、ノートを持って、学校へ出た。ただ三十円を懐にすることだけは忘れなかった。あいにく時間割のつごうが悪い。三時までぎっしり詰まっている。三時過ぎに行けば、よし子も学校から帰って来ているだろう。ことによれば里見恭助という兄も在宅かもしれない。人がいては、金を返すのが、まったくだめのような気がする。

また与次郎が話しかけた。

「ゆうべはお談義を聞いたか」

「なにお談義というほどでもない」

「そうだろう、野々宮さんは、あれで理由のわかった人だからな」と言ってどこかへ行ってしまった。二時間後の講義の時にまた出会った。

「ひろたせんせい だいじょうぶ 広田先生のことは大丈夫うまくいきそうだ」と言う。どこまで事が運んだか聞いてみると、

「いや心配しないでもいい。いずれゆっくり話す。先生が君がしばらく来ないと言って、聞いていたぜ。時々行くがいい。先生は一人ものだからな。我々が慰めてやらんと、いかん。」

こんどなに か こ  
「今度何か買って来い」と言っぱなして、それなり消えてしまった。すると、次の時間にまた  
どこからかあら 現われた。今度はなんとおも 思ったか、講義の最中に、突然、

かねう と  
「金受け取ったりや」と電報のようなものを白紙へ書いて出した。三四郎は返事を書こうと  
思っ、きょうし ほう み  
て、教師の方を見ると、教師がちゃんとこっちを見ている。白紙を丸めてあし した  
た。講義が終るのを待って、はじめて返事をした。

「金は受け取った、ここにある」

「そうかそれはよかった。かえ 返すつもりか」

「むろん返すさ」

「それがよかろう。はやく返すがいい」

「きょう返そうと思う」

「うん びるす 昼過ぎおそくならいるかもしれない」

「どこかへ行くのか」

「行くとも、まいにちまいにち え  
毎日毎日絵にかかれに行く。もうよっぽどできたろう」

はらぐち ところ  
「原口さんの所か」

「うん」

三四郎は与次郎から原口さんの しょく しょ  
宿所を聞きとった。